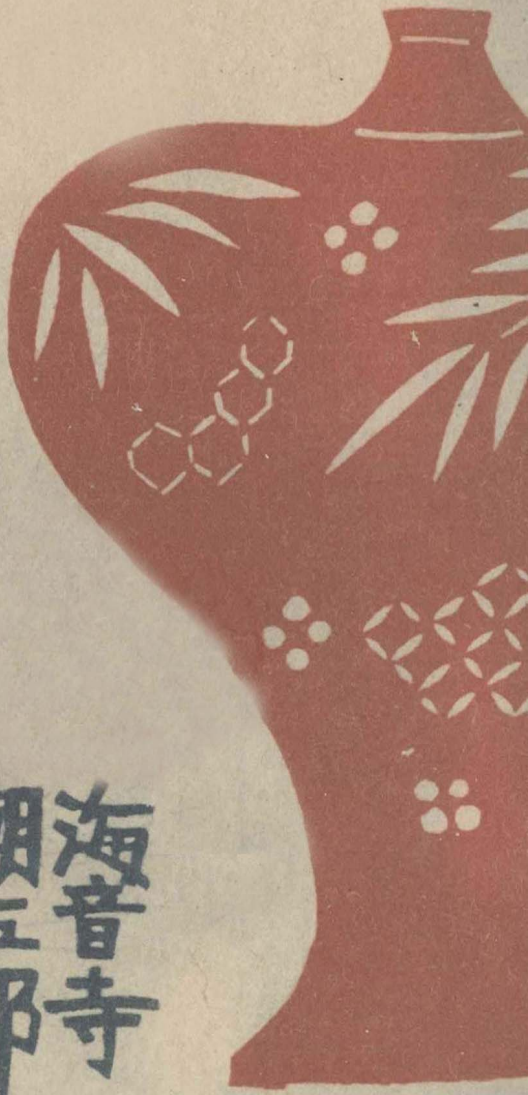

十

海音寺潮五郎全集

海音寺潮五郎全集　第七巻
伊達政宗
全二十一巻・第三回配本
九〇〇円

昭和四十四年十二月二十日発行
著者　海音寺潮五郎
装幀　芹澤銈介
口絵　中尾　進
発行者　大田信男
印刷所　凸版印刷
発行所　朝日新聞社
東京　大阪　北九州　名古屋

目次

火の山

火の山

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

昭和三十六年一月七日―三十七年八月十五日「東京新聞」

西から来る波

琉球本島の那覇の港から三里ほど南に糸満という村がある。漁師ばかりの純然たる漁村だが、色々な点でおそろしく特色的な村であった。

第一には人種がちがう。いつの時代にかこの地に漂着した北欧民族の一分派の子孫で、糸満とはその首長イートマンの名が転化したとも伝えられている。

第二に異民族であるというので、固有の住民らから差別待遇されて、同族との結婚をくりかえして来たためであろう、容貌骨格が周囲の住民らとひどくちがう。骨格雄偉、顔形また彫りが深く、なかなかりっぱなのである。

もちろん、そのはじめにおいては婦人は数が少なかったか、皆無であったかに相違ないから、掠奪その他の手段で原住民の女らと結婚したのであろうが、ある程度に女の数が出来て以後は、配偶者は同族の中にもとめることになったにちがいない。

第三に、彼らは一般住民らに一格下のものとして軽べつされていたが、彼らはかえって自分らを一格上のものと考え、一般住民を眼下に見くだして傲然たる態度でいる。

第四に、彼らの勇敢さはほんとと思われないくらいである。彼らは先祖代々のはば三尺、長さ三間ほどのサバニ（丸木船）に数人うち乗って、何十里も何百里も漕ぎ出して漁をする。波浪に舟がくつがえっても、あわてさわがず、舟をおこして水をかい出し、悠々として航海をつづけるのである。

彼らはよく海底にもぐって鱶を捕えるが、その方法はまことに剛胆でユーモラスである。鱶という魚はなまけもので、よく海底で眠っているというが、糸満の漁夫はそっとその尾の方にしのびよって綱で縛りつけて浮き上り、いきなりエイヤエイヤと引き上げにかかる。海底の夢を破られて、鱶はおどろき狼狽し、怒り荒れ狂うが、舟がひっくりかえっても平気な相手だからどうしようもない。力つきて引き上げられ、たたき殺され、皮は刀の柄巻の材料になり、肉はカマボコの原料となってしまうという寸法である。

現代になって舟に発動機をそなえつけるようになってからは、彼らの漁場は濠洲にまでのび、この大戦前、彼らはアラフラ海で蝶貝の密漁をしたが、監視船に発見されて追跡されてもさらにおどろかない。一人が海にもぐって監視船に泳ぎつき、スクリューをしばりつけて身動き出来ないようにしておいて、悠々と逃げたというのである。

第五に、彼らの家庭経済は夫婦別である。夫は獲って来た魚介類を妻に売ってその金のある間は酒を飲んで遊びくらし、金が尽きてはじめてまた漁に出る。妻は夫から買った魚介類を他にさばいて金を得、それで家族の生計にあ

て、のこれば自分のものとして貯蓄するというしくみである。

こういう生態は、ゴーゴリやトルストイの小説に出て来るコサックの生態にまことによく似ている。「海のコサック」とぼくはいっているが、おそらくこうした生態は、彼らがその故郷北欧から伝承したものと日本の海岸・島嶼民族の生活習慣とが習合して形成されたものであろう。

弘化三年の五月七日のことであった。糸満の若い漁師らが四人、琉球本島の西北方の伊江島の近くに鰹漁に出かけた。鰹漁にはもう季節がはずれているが、おくればせの小さな魚群が来ることもあるので、それを狙ったのであるが、半日さがしても行きあわない。

「伊平屋島の方に行ってみゅうか」

と、相談して、柁を東北にとって帆走にかかったが、半里ほど走ったかと思うと、一人がおどろいた声をつっ走らせた。

「おうら、見ろやい。またまた妙な船が来るぞい」

三人はその男の指さす西の方を見た。この季節になると毎日そうだが、一めんにはだら雲のかかった空の下の黒く見えるくらい真青な海を、三隻のスクーナー型の大きな帆船が、舳と両舷に泡立つ白い波を立てて来るのが見えた。

この船が西洋の船であることを、彼らはよく知っている。三年前から、琉球にはしきりに西洋の船が来る。現におとといもアンゲリヤ（イギリス）の船が那覇に来て、まだ碇泊をつづけているのである。

だから、彼らはそのなかまの船だと思っていたが、次第に近づくにつれて、帆柱の上にはためいている旗がアンゲリヤのものとちがうことに気づいた。三色のこの旗がフランスのものであることも、彼らはよく知っている。三年の間にこの土地を訪れる西洋の船は、フランス船でなければアンゲリヤ船、アンゲリヤ船でなければフランス船であったのである。

「フランスまで来たのかいな。首里じゃあいそがしいことじゃな」

と、いっているうちに、三艘の船団は二手にわかれた。一艘は真直ぐにこちらをさして来るが、二艘はへさきを南に向けたのである。

はじめ、糸満漁夫らは、大して気にはとめなかった。首里の王様やお役人衆があたふたしなさるだけで、自分らに関係のあることではないと思っていたが、フランス艦隊——甲板上に大砲をそなえつけているので、戦さ船であることは一目でわかった——が二手にわかれたのを見ると、オヤと思った。

せわしく目を左右に動かして、両方を見ていると、二艘は黒い珊瑚礁に白波の泡立っている伊江島の西方の海を帆を斜めにして南下して行きつつあり、一艘は彼らのいるつい二三町沖を真直ぐに運天港の方角に向いつつある。その船のつくる波が大きなうねりとなって、糸満漁夫らの舟

をいつまでもゆすり上げゆすりおろした。
「ふた手になんどわかれおって、大分これまでと違うようじゃの。ご注進に漕ぎもどらんでもいいじゃろうかな」
「おれもそう思うとった。こりゃやっぱり知らせに漕ぎもどった方がよいぞや」
相談一決し、帆をおろし、エイサエイサとこぎ出した。
人を疑うことを知らない素朴な彼らではあったが、元来一団となって来た船がふた手にわかれたのを眼前に見ては、大いに疑惑しないではおられない。那覇に向った二艘が正面からかれこれと役人らに交渉をつづけている間に、運天港方面からおし上る計略かも知れないと思った。
元来琉球は武器皆無の国だ。室町時代の中期、琉球王家は王家の安泰のため、一切の武器を国民から没収したが、江戸時代のはじめ薩摩の島津氏はこの国を征服すると、これを踏襲し、武器という武器を一切琉球人に持たせなかった。刀や槍や弓矢もないくらいだから、鉄砲なんぞあろう道理がない。
国の護りとしては薩摩の武士が百人、一昨年からは百五六十人増員され、都合二百五六十人いるが、これは首里近くにいる。首里から運天港まで十六七里もある。もしフランス人どもがそのつもりでかかるなら、全然無抵抗でおし上ることが出来るだろう。おし上ってしまえば、やつらは鉄砲もうんと持っておれば、大砲もある。ごろごろ、ごろごろと押しさがってくればこちらはどうにもなりはせん。そうなれば、那覇にむかった二艘も、にこにこ笑いの相づちをぬぎすてて押し上りにかかるだろう。いくら薩摩の武士どん達が気ばっても、わずかに二百五六十人ではふせぎのつくものではない。一刻も早く注進して防ぎの手を打ってもらう必要がある。
以上が、糸満人らの判断であった。
「そら漕げ、エイサ、そら漕げ、エイサ……」
波しぶきを浴びながら、四人は必死に漕ぎつづけた。
糸満人らのくり舟が那覇の港の入口についた時、日はもうとっぷりくれて、夜になるときまって晴れわたる空は、半弦の月と星のかがやく南国特有の花園のように美しい夜空になっていた。
那覇の港の入口は左右から珊瑚環礁がのびているが、この港は奥に淡水湖があって、そこから真水と泥が流れて出るためであろう。入口には珊瑚礁がないので、相当大きな船も楽に出入り出来るのである。
糸満舟が月と星の明りの中を港に入ると、目の前に見上げるように大きな船が二艘碇泊している。甲板にも船室の窓にも灯をあかあかとつけているのが港を圧するばかりの勢いで、いつもは夜景の美しい那覇の町も至って灯影が少なく、なんとなくしゅんとしているように見えた。
この二艘の巨船が伊江島沖で今日見たフランス軍艦であることはまぎれがなかった。この船の奥にも西洋型の船が錨をおろしている。これは一昨日来たアンゲリヤ船であっ

た。おとといみた時はずいぶんな大船のようであったが、こうしてフランス軍艦とならべてみると、三分一にもあたらない。これはへさきとともと両舷に一個ずつ色のついた灯をつるしただけで、ひっそりとおしだまっているように見えた。

糸満人らは、かいの音をひそめて、フランス船を大きく迂回して岸に漕ぎつけ、舟をもやって上ろうとしていると、かすかに灯影の漏れている向うの建物の中から走り出して来た人影が数個あって、岸から七八間はなれたところで立ちどまり、

「これもうし、めったに上ってはなりませんぞ。めったに上っては、国のおきてがゆるしませんぞよ」

といった。声がふるえている。身をかがめて、こちらをすかしみるようにしている。すわといえば、横ッとびに逃げ出しそうな姿勢でもあった。

西洋両国の船に不時におしかけられて、番のために出張っている役人衆であるとはすぐわかった。糸満人らは言った。

「わしら、糸満の者でござりまするが、ご注進をしようと思ってまいったのでございます」

「何じゃと！」

臆病げな役人らの様子はたちまちかわった。大きく身をそらした。

「糸満の者か！　何を今時分こんなところへ来て、人に気をもまするのか！　けしからんやつらじゃ」

と、がんがんどなりながら一斉に近づいて来て、糸満人らのえりをつかみ、しめ上げるようにしてゆさぶりはじめた。

糸満人らはうっかり愛国心など出したためにとんだ災難になりそうであるのを後悔しながらも、さけんだ。

「わしらはご注進に上ったのでございます。おこらっしゃることはございますまい。なんでこんな目にあわんければならんのでございます！」

腹を立てている声は、外洋の珊瑚礁に寄せてくだける波の音ばかりのあたりにがんがんひびきわたった。

役人は狼狽して、手をはなした。

「これ、何という声じゃ。そんなにおらばんでもよいわい。これ、しずかにせい。何じゃと？　注進に来たんじゃと？　何の注進じゃ？　こちらに来い」

おろおろとたしなめながら、彼らが今飛び出して来た建物につれこんだ。

この建物は一昨日アンゲリヤ船が来て、その見張りのためににわかに建てられたものにちがいなかった。すべてこの国ではお上の建物は丈夫な石垣をめぐらした中に半ば中国風をまじえた様式をもった家屋が建っているのであるが、この建物は壁は荒板をたたきつけただけ、屋根は百姓家のように草でふいてあるにすぎない。狭くもある。せいぜい四五坪のものだ。すべてが急ごしらえで、ことさらに

貧しく粗末にと心掛けたようにさえ見えた。

蘇鉄油の燈明が薄く照らしているその建物の中で、琉球服の役人らは、糸満人らを前に引きすえて、委細のことを聞いた。委細のことと言っても、伊江島の北の沖で、三艘の異国船が二艘と一艘との二手にわかれ、二艘は今そこに碇をおろしている船じゃと思うが、一艘は運天港の方角にむかったようであるのを見たと言ってしまえば、あとはもう言うべきことはのこっていない。

しかし、役人らは執拗にくりかえしくりかえし、同じことを聞いた後、ひたいを集めてぼそぼそとささやき合っていた。糸満人らはもそもそと身を動かし、たがいに目くばせしてうなずき合った後、おずおずと言った。

「わしら、かえらしてもらいたいのでございますが……」

「待て、待て、まだご用が済まんぞ」

役人らは制止しておいて、なお小声で談合をつづけている。

「それでも、わしらもうなんにも申し上げることはございません。知っていることはのこらず申し上げましたで……」

役人らはおそろしく腹を立て、火のついたようにどなり立てた。

「こちらにご用があるというのに、何をうるさいことを言うのじゃ！　待っておれというたら、待っておるんじゃ」

糸満人らはちぢみ上った。海に出ては信ぜられないくらい勇敢で向う見ずな彼らも、役人には歯が立たない。

役人らはなおいつまでも評定をつづけた後、首里の政庁に報告することになったが、誰がその役になるかについて、またしばらくもめた。内地の藩なら足軽程度の者である下役人らにとっては、首里の政庁はこわいところであった。この上の出世昇進を望まず、間違いさえおこさず生涯を無事に過ごすことを念願しているこの人々には、お膝もとに近づくことが第一の禁物であった。権力の中心に近いところは、手腕を認められる機会も多いが、欠点を見つけ出されることも多いのである。敬遠するにこしたことはない。

とくに、一昨日、今日と、引きつづいての西洋船の入港に、政庁は狼狽しきっている。こうして港に両国の船が入って来たというだけで、まるで度を失ってあたふたしているだけだ。そんなところに運天港にも片割れが一艘入ったなどの知らせを持って行って、上司のきげんがよかろうとは思われないのだ。

しかし、くじ引きできめて、二人が行くことになり、くじにあたった役人らは、わらじを出してはきにかかった。

糸満人らは、またおずおずと切り出した。

「あたしどもはもうお帰しねがえるのでございましょうか……」

報告に行かねばならないことになった二人は、むしゃくしゃ腹のはけ口を見つけた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

「阿呆め！　汝らを連れて行くのじゃわい。大切な生き証人をかえしてなろうか！」
「へっ！」
こちらは仰天した。
「わたしどもは、先っき申し上げたことのほかは知らないのでございます。お連れになったとて……」
と哀訴にかかったが、相手は一層腹を立てた。
「生き証人じゃというのが、わからんか！　連れて行かねば、われわれの落度になるわい！」
七日の月と星のさしている下を、四人の糸満人を先に立てて追い立てるようにして、二人の役人らは首里への石原道を歩き出した。

琉球人が日本民族と血を同じくし、言語の系統を同じくし、文化の根柢を同じくしていることは、疑うことは出来ない。
おそらくは遼遠の太古、まだ日本民族が統一国家を営まず、部族毎に、部落毎に小国家をなして無数にこの狭長な列島上にならび立っていた時代、その一つが、地理の関係上統一のなかまに入れず、この島だけの独立国としてとりのこされたのであろう。
しかしながら、この国のことが最も古く史籍にあらわれるのは、日本の史書ではない。隋書である。煬帝が兵をつかわしてここを征服しようとした記事があるのである。しかし、絶海の島国である上に琉球人の抵抗は勇敢で、煬帝はこれを遂げることは出来なかった。煬帝の時代は日本では推古朝、聖徳太子の時代だ。日本書紀にはこの推古朝時代に種子島以南石垣島までの島人らが大和朝廷に入貢したことを記録しているが、琉球あるいはオキナハの名は見えない。
その後の中国との関係はほとんどわからない。もともと絶海の孤島だし、物産にもめぐまれない土地だ。煬帝のような虚栄心の強い帝王は名誉心を満足させるためだけでも征服する気にもなろうが、後の歴朝の帝王らは実利のともなわない冒険は避ける。放置しておいたのであろう。
日本は大化の改新によって統一国家となったのであるが、この国とは時たま遣唐船の中継地とするくらいのことで、ほとんど関係のないこと五世紀以上におよび、平安末期になってはじめて関係がついた。この国の伝説によると、鎮西八郎為朝が八丈島からこの島にわたって来て、貴族の姫君と結婚し、姫君の胎に子供をとどめて去ったが、その子供が舜天王で、長じて、それまでこの島の王であった天孫氏にかわって王となったというのである。
これは伝説であって、史学的には十分な徴証のあることではないが、現在の琉球語が平安末期から鎌倉時代にかけての日本語に非常によく似ている点から、この時代に日本と最も親密な往来があったことは推察がつくのである。
その後二世紀ほどを経て、日本では南北朝の頃、中国で

は明のはじめ、琉球は中国の属国となって年々朝貢することになった。朝貢といっても、実際は臣称し敬意を表することによって、明から物資を恵んでもらうことに目的があった。多少の品物を献上すると、明の方では回賜と称して数十百倍のものをくれるのだ。土地狭小で天産に恵まれない孤島国としては、生きて行く唯一の手段であった。

この頃の琉球は貿易をもって国の経済基本としている。すなわち朝貢貿易をもって中国と交易するとともに、南はシャム、ジャワ、ルソン、安南等と交易した。もちろん、日本ともそうで、琉球船は堺、博多その他にひんぱんに出入りした。つまり東亜の中継貿易がその国策だったのである。琉球政府が正式に日本に服属を申しこんだわけではないが、その貿易商人らが琉球は日本国土で、われらはその民であると言っていたからに違いない。足利幕府は琉球を日本国土と見なして、薩隅、日三州の守護大名である島津氏に琉球をあたえると申し渡している。これがずっと後年島津氏がこの国に出兵して征服する名目の一つとなった。

琉球が中国に服属して半世紀ほどたって、日本では応仁の大乱がはじまり、足利将軍の勢いはおとろえ戦国乱離の姿となったが、琉球は日本との貿易は継続していた。

しかし、南北朝の時代から戦国時代の末に至るまでの間は日本の海外貿易が最も盛んな時代であるから、日本船もさかんに琉球に出向いて貿易したり、ここを中継地として大陸や南洋方面に向ったりした。当時は倭寇時代でもある。ここに寄港する日本船の中に、多数のバハン船があったことは言うまでもない。

戦国時代は豊臣秀吉によって平定統一された。秀吉は征服欲の権化だ。フィリピンにも、印度にも、朝鮮にも、帰服朝貢をうながす国書をおくりつけ、ついには明を武力征服しようと朝鮮に兵をくり出したほどの男だ。どうして琉球を黙過しよう。帰服をうながす国書をおくった。

当時の琉球は依然明に服属朝貢をつづけていたが、貿易船の往来がひんぱんなのだから、日本の事情も、秀吉のおそるべき人物であることもよくわかっている、ほどよくあしらっておくを得策と考えた。使者をおくり、貢物をささげた。

間もなく、秀吉は朝鮮役をおこした。

秀吉は琉球が服属したと信じている。軍役を課し、一万人三年間分の糧食を朝鮮に送りつけよと命じた。

秀吉の朝鮮役を今日調べてみて、最も意外に思うのは、その準備不足、とりわけ調査不完全であるが、ここにもそれが露呈している。一万人の三年間の兵食といえば米五万四千石である。淡路島の二倍あるやなしの面積しかない上に、全島珊瑚礁で地味磽确、米はもちろんのこと、他の農産物もいたって貧寒な琉球がどうしてこんな負担にたえられよう。この当時は砂糖きびも琉球いももまだ渡来していなかったのである。

過重というより、不可能な負担を課せられて、当時の琉

球王尚寧は、にわかに日本にたいするいや気がきざした。将来とて、また大きな負担を課せられるかも知れないとの不安ももちろんあったが、当面最大の不安は明の敵国である日本と親しくしていることが明に知れることであった。日本は何もくれないどころか、乏しい中から捲き上げようとまでしたが、明は毎年たんとものをくれるのである。どちらをとり、どちらを捨てるかは、考えるまでもなく明瞭だ。うやむやのうちに日本との交通を絶った。これがこの十八年後に島津氏が征服の師を向ける第二の名目となった。

朝鮮の役がはじまって七年目、秀吉は死に、それから五年たって、徳川家康が天下人となった。このことはもちろん琉球では知っていた。琉球からは船を日本に出さなかったが、日本からは御朱印船が往来寄港しているのだ。けれども、琉球は江戸幕府に服属はもちろん、通好の使者も出さなかった。利得することは少ないくせに危険の大きい日本などとつき合うことはないと思ったのである。

徳川幕府が成立して六年目、慶長十四年の三月、当時の島津家の当主家久は、幕府の許可を得て、南島地方の征伐にかかり、まる一月で奄美大島から琉球本島に至る島々をのこらず征服し、大島・喜界ガ島・徳ノ島・沖ノ永良部島・与論島等の島々は直轄領とし、琉球本島とその付属の島島は属領とした。

この時まで島津家の所領は薩摩・大隅・日向南部で総石数五十余万石くらいであったが、これらの諸島を二十万石位に査定して、総計七十二万石、加賀の前田家につぐ大々名となり、その後新田の開発やなんぞで七十六七万石となり、さらにこの小説の時代には八十八万石ほどになっていたと伝える。

島津家は琉球を自分に専属はさせなかった。中国の属国たることをつづけさせた。この時から六年目に、明はほろんで清となるのだが、早速に清に服属を申しおくらせ、朝貢をつづけさせた。こうする以外には琉球が立ち行かない国であったからでもあるが、さらに大きな目的は琉球をして中国との貿易を営ませ、その利を得るためであった。

両国の属国というような変態的な関係を清が許容する道理がない。琉球は極力薩摩との関係を清にかくした。薩摩もまたかくさせた。琉球王の代がわりには、清から冊封使が来たが、その冊封使の滞在中は、薩摩から出向している役人らは息をひそめ姿をかくしていたのである。

日・中両国の属国という変態的な立場である上に、被搾取国という境遇なのだ。苦痛でなかろうはずがない。

島津氏の征服の直前に、琉球には甘薯の種苗が中国福建省から輸入され、直後には砂糖きびと製糖法とが、同じく福建省から輸入されているから、琉球人の生活はずいぶん楽になるべきはずであったが、薩摩にとってはこれも搾取の好対象でしかなかった。何もなかった頃にくらべてはいくらか楽になったにはちがいないが、要するにいくらかの

程度で、大部分は搾りとられたのである。

こんな圧迫を受けて抵抗運動がおこらないはずはない。数々の口碑や伝説がそれを伝えている。この百二三十年前に琉球王家は王家にたいする叛乱を封ずるために貴族といわず、庶民といわず、一切の武器を所持することを許さず、没収して王家の府庫に収納したが、これは薩摩にとっては最も好都合である。この方法をきびしく踏襲して、一切の武器を琉球人には持たせなかった。

しかし、人間は不死鳥のようにねばり強い。右手を失えば左手が強力になり、盲目になれば聴覚その他の器官がとぎみがかれて代償する。琉球人らは中国の拳法を輸入し、独自の工夫と鍛錬を加えて、五体ことごとくが武器としてはたらく空手術を案出して剽悍絶倫、天下の勁兵をもって自ら任ずる薩摩武士らに一目おかせるようになった。

「琉球ン奴どが、ドツクォ（拳骨の意、語原は独鈷であろう）は用心せんと、いのちをおとすど」

と、無茶威張りに威張って侮辱したり、しいたげたりすることを慎むようになった。

こんな話が伝わっている。ナポレオン一世がセント・ヘレナに流されてからのこと、東洋の航海から帰って行く船がセント・ヘレナに寄港した時、船長から、東洋には全然武器を持たない琉球という小独立国があると聞いて、

「ばかな、武器のない国があろうはずがない」

と、どうしても信じようとせず、くりかえし説かれて、驚きあきれ、自失したようになったというのだ。

琉球が武器を持たなくなったいきさつまで聞かされたら、いくらナポレオンだってこうまで疑い驚くことはなかったであろうが、いきさつ抜きに結果だけ聞かされては、戦争するために生まれて来たような彼には信ぜられなかったのも無理はない。相手がナポレオンだけに、皮肉な興味をそそられる話である。

さて、とにかくもこうして琉球と奄美大島は薩摩藩の宝庫となった。元来、薩摩は武士の数が多い。城下士と外城士（郷士）とを合わせると、全人口の四〇パーセントに達する。こんなに武士の数が多くては、総石数五十余万石では藩庫に入るものはいくらものこらない。それをカバー出来たのは、大島諸島と琉球諸島との搾取と琉球を通じての中国貿易のおかげだったのであるが、いずれにしても、大島・琉球の苦しみの上に利得したのである。

環境にたいする人間の順応力は想像出来ないほど強靱である。琉球人らはいつか環境に慣れた。島王国には平和がつづいた。

この国を外の世界から訪れるのは、薩摩の船以外には、中国皇帝からの冊封使の船があるだけだ。しかも、それは王の一代にただ一回のことであり、滞在の日数もそう長くないのが普通だ。平安が乱されることはなかった。

孤島の平安は二百三十五年つづいて、天保十五年（弘化

元年）になったが、その年の三月十一日、思いもかけない訪問者があった。フランスの軍艦一隻が来て、三カ条の要求をつきつけたのだ。

一、交際の道をひらき、たがいに通信し合いたい
一、貿易したい
一、キリスト教の伝道をゆるしてもらいたい

琉球側では、交際通信の要求にたいしては、

「弊国は代々清国の属国であるから、自由に他国と交際する権利はない」

と答え、貿易については、

「弊国は大洋中の小孤島で天然の物産がまことに乏しい。人民の食糧さえ国内の生産では大いに不足しているので、乏しい原料をきつい工面をしてこれを代償として日本国薩摩から入れている状態である。とうていこれ以上他国と貿易する力はない」

と答え、キリスト教の布教要求にたいしては、

「弊国は昔から孔孟の教えを信奉している故、他の宗教を容れる意志はない」

と答えた。

フランス人らはずいぶん執拗で、再三再四、琉球官憲と談判したが、九日の後、

「われらは長くこの地に碇泊するわけに行かない職務があるから、この度は立ち去るが、再来の時までにわれわれの要求について熟慮しておいてもらいたい。ついては、当国国語習得のために、フランス人一名、通訳の中国人一名をとどめておく故、よろしくお世話願う」

と言いおき、二人を上陸させ、帆を上げて立ち去った。

フランス軍艦のおいて行ったフランス人は宣教師で名をメルメ・デ・カションといい、中国人の通訳は澳吾思（おうごし）といった。

琉球政府はこんな人達を住まわせることは国法違反であると抗議したのだが、かまわず置いて行かれたのであった。しかたなく、薩摩から来ている代官の差図を受けて、那覇の天久寺におくことにした。

「貴殿方をとどめおくのは特別のことでござるによって、諸事つつしんで、寺内から出ないようにしていただきたい。住民共との交際も一切禁断ですぞ」

ときびしく申し渡した。もちろん中国語で言った。十分に理解したように見えたのだが、さらにつつしむ様子がない。あたり前のような顔で外出する。メルメ・デ・カションというこのフランス人は、後に幕府の外国奉行栗本鋤雲や小栗上野介と相結んで、幕末の日本政界に大活躍をした人物だけあって、一筋縄では行かない。番人共が制止すると、にこにこしながら手をふり、何やらわからないことばで言って、出て行ってしもう。腕ずくで引きとめるわけにも行かず、おろおろしながらついて行くよりほかはない。

二人は民家に入り、身ぶり手まねで、そこの家の者に話しかける。最初は自分の目や鼻や耳や、からだの諸部分を

示したり、いろいろな器物を指さしたりして、その名称を聞いている模様で、聞くにしたがって帳面に書きつけていた。つまり、琉球語を習得しようとしているらしいのであった。

番人らが政庁に訴えたので、政庁では附近の民家に、天久寺の異人らに話しかけられても、決して応答してはならないとふれをまわした。だから、住民らは二人があらわれると、何をおいても一目散に逃げた。

二人は腹を立てた。澳吾思は番人がしらにむかって、

「われわれはフランス皇帝ナポレオン三世の命令によってこの国にとどまっている者だ。そのわれわれを一切人々と会わせないようにするのは、われわれを牢獄に入れたと同じである。礼を失しているとは思わぬか」

と、きびしく抗議した。

「われわれは政庁の命令を忠実に行っているにすぎない」

と下役人共が答えると、それでは政庁の役人に来てもらいたいと要求した。

政庁の役人が来ると、打ってかわって愛嬌のよい顔になって、

「この国のことばを教えてくれる者をお世話願いたい。われわれの任務はその習得にあるのだから。そうすればわれわれも他出しないですむ。お互い便利であろう」

と要求した。

政庁は薩摩の代官に伺いを立ててその許可を得て、人を選んで天久寺につかわすことにした。

中国語が出来る者でないといけないが、貴族や上流士族は行きたがらなかった。役人もまた敬遠した。下級士族の中に北京の国子監（大学）に学んだ後、通事として長い間福州の琉球館に駐在していて、自由に中国人と会話が出来、中国の役人や文人や学者らと詩文の唱和が出来る者がいたので、それをえらんで、つかわした。

異人らは大いに満足した様子で、もう外出もせず、寺内にこもって熱心に琉球語を学びはじめたので、番にあたった小役人共は言うまでもなく、政庁の役人らも、王も、薩摩代官も、安堵の胸を撫でおろした。

これらのことは、すべてその時々に早舟を仕立てて鹿児島に報告した。この早舟は「飛舟」と名づけられていた。くり舟を二艘ならべつらねたものだ。船材には国頭（琉球北部）地方の山の松材をつかい、船体には鱶の油をしみこむほど重ねて塗って防水してある。漕ぎ手にはもちろん糸満部落の漁夫らがあたった。髪をぼろぎれで包んで、褌一貫の彼らがかいをそろえて、エッシエッシとせい一ぱいの力で漕ぐと、風のない日でも一時間に三里を快走することが出来た。飛舟の名にそむかなかったのである。

鹿児島の藩庁もおどろいて、最初の報告を受けとるとすぐ、警備兵百五十人を派遣し、同時に江戸屋敷の藩主斉興に報告した。斉興は幕府に上申し、長崎奉行にも知らせた。幕府への報告にはすでに警備兵をくり出したことをつ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo